

## M.バルトリ 生誕120年と空間言語学

Il 120° anniversario della nascita di M. Bartoli e la linguistica spaziale

菅田 茂昭

Shigeaki SUGETA

バルトリ (Matteo Giulio Bartoli) は、1873年11月22日ユーゴスラビアのイタリア国境に近いイストリアで生まれた。イタリアの近代言語学の誕生を告げる「イタリア言語学紀要」(Archivio glottologico italiano=AGI)がアスコリ (G. I. Ascoli, 1829-1907) により創刊された年である。ウィーンでロマンス語研究の基礎を築いたディーツ (F. Diez, 1794-1876) を継ぐマイヤー・リュプケ (W. Meyer-Lübke, 1861-1936) に学んだが、やがてパリにおけるジリエロン (J. Gilliéron, 1854-1926) の言語地理学との出会いが彼の学問的方向を決定した。

文献学者ベルトーニ (G. Bertoni, 1878-1942) とともに、クローチェ (B. Croce, 1866-1952) やジェンティーレ (G. Gentile, 1875-1944) の理想主義の影響を受け (ただしフォスラー K. Vossler, 1872-1949 に対しては批判的であった点がベルトーニとは異なる), そのため最初にマイヤー・リュプケから受け継いだ、物質主義的と考えられた少壮文法学派のアプローチを、先輩アスコリに続いて批判する側に立つにいたった。やがてジリエロンの言語地理学を洗練して新しい学問に発展させ、少壮文法学派に代わるべく、みずから新言語学 (neolinguistica) 派を名乗る学者となった。新言語学は、少壮文法学派による、盲目的な音法則に基づく言語間の近親関係ではなく、むしろ地理的に連続すなわち隣接する諸言語に視点を移し、隣接するがゆえにみられる近親性を究明しようとしたのである。したがってバルトリ自身晩年にはその学問をむしろ空間言語学 (linguistica spaziale) と呼び直している。言語学の発達史を考慮すれば、まさに時代の要求に応える学者であったといえる。なお、バルトリのクローチェへの接近は、彼が哲学的アプローチを選んだためではなく、言語変化の過程を少壮文法学派のように物質主義的に説明することを嫌ったためであったといわれる。しかし音法則の盲目性を容認せず、語の改新はすべて創造であり、優勢なモデルの模倣から生まれると主張したからには、マイヤー・リュプケへの反逆となった。



MATTEO BARTOLI (1873-1946)

生まれ故郷のことばであるダルマティア語 (1989年死滅) の研究により、学者としての

地位を築いた彼は、ピサ大学をはじめとして、トリノ大学で言語学を講じ、彼の計画した『イタリア言語地図』(ALI)は未刊のまま同大学の研究室にこんにちまで受け継がれている。彼の方法論は『新言語学入門—原理・目標・方法』(Introduzione alla neo-linguistica, Principi-scopi-metodi, Genève, 1925), ベルトーニとの共著『新言語学概要』(Breviario di neolinguistica, Modena, 1928), ヴイドッシ (G. Vidossi)との共著『空間言語学大要』(Lineamenti di linguistica spaziale, 1943), さらにロマンス語から印欧語に及ぶ諸論文を収めた『空間言語学論巧』(Saggi di linguistica spaziale, Torino, 1945)といった代表的著書にまとめられている。

さて、バルトリからの少壮文法学派への非難は、かれらが音法則の規則性を頼りに言語史を追求するあまり見過ごした点に対してであった。それは言語変化に伴う筈の次の三つの点であり、これらを究明することが新言語学の課題として提案されたのである。

- I. 言語発展段階の間の年代的関係：ラテン語 paterの a とサンスクリット語 pitárの i がともにナポリ方言の -e にも似た音に由来すると考える言語学者も、a と i のどちらが古形であるかに十分に答えているだろうかという疑問。
- II. 改新（伝播）の中心：たとえば plus が MAGIS より新しい形式であることが知られても、こんにち分布している地域における改新なのか、それとも他の地域からもたらされたものなのかという疑問。
- III. 改新の原因：plus が、先行する MAGIS に代わって好まれた理由はなにかという疑問。

これら三つの疑問に答えることが新言語学の使命となった。これらの問いに対して少壮文法学派は答える必要性すら認めないか、答えたとしても正面から取り組んでいなかったからである。

まず、言語の二つの発展相の間の年代的関係は、ただ二つの規範から推定できるとする。すなわち、それぞれの相に該当する文証間の年代的関係およびそれぞれの相に該当する地域間の地理的關係からである。

運よく両者に頼れる場合もあれば、一方のみで、満足せざるをえない場合もある。文証の規範は「先に文証される発展相の方が、一般に古形を示す相である」という、すでに知られた証明不要の規範である。ところが地域の規範はあらたに証明を要する。彼は五つの

BIBLIOTECA DELL'ARCHIVUM ROMANICUM  
DIRETTA DA GIULIO BERTONI  
Linguistica Vol. 12

## INTRODUZIONE ALLA NEOLINGUISTICA

(PRINCIPI - SCOPI - METODI)  
DI  
MATTEO BARTOLI

PROFESSORE ALLA R. UNIVERSITÀ DI TORINO



GENÈVE  
LEO S. OLSCHKI, ÉDITEUR  
1925

規範を挙げる。それぞれ孤立地域、周辺地域、大地域、後代地域、消滅地域と名付けられる地域に係わる規範である。

## 1. 孤立地域の規範

交通の不便な地域は孤立した地域といえる。「より孤立した地域は、概して古い相を保存する」という規範を設けることができる。たとえばサルジニアおよびレティアはトスカーナよりも、ポルトガルはカタルニアよりも、ヴェリアはフィウーメよりも孤立している。二つの地域を比べると、古形が孤立地域にみられる。(以下具体例を示す際、バルトリに従って古形をキャピタルで、また用例は現代語の形式ではなく、元のラテン語の形式で示す。)

I.	サルジニア	トスカーナ
	EQUA	caballa (雌馬)
	( <small>ロド-方言EBBA</small> )	( <small>トスカーナ方言cavalla</small> )
II.	レティア	トスカーナ
	AGER	campus (畑)
III.	ポルトガル	カタルニア
	COMEDERE	manducare (食べる)
IV.	ヴェリア	フィウメ
	CAPUT	testa (頭)
1.	serrare	CL(A)UDERE (閉める)
	( <small>ロド-方言serrare</small> )	( <small>トスカーナ方言CHIUDERE</small> )
2.	aviaticus	NEPOS (孫)
3.	thius	AVUNCULUS (伯父, 叔父)
4.	brut-is	NURUS (嫁)

ローマ数字で示した項目の方が、対応するアラビア数字で示した項目(反例)をはるかに上回る。したがって言語史においても、他の精神活動の表示と同じく、島の方が大陸より(cfr. I, IV), また山が平野や海辺より(cfr. II), 中央部より周辺部が(cfr. III), 大都市より小都市の方が(cfr. IV)より保守的といえる。

## 2. 周辺地域の規範

イベリアやダキアのような周辺地域をガリアやイタリアのような中間地域と比べると、中間地域が孤立地域でない限り「周辺地域は、概して古い相を保存する」。

	イベリア	ガリア	イタリア	ダキア
I.	EQUA	caballa	caballa	EQUA (雌馬)
II.	CAPUT	testa	CAPUT	CAPUT (頭)
III.	OVIS	OVIS	pecora	OVIS (羊)

反例は、

1. passer AVIS AVIS passer (鳥)
2. istud -HOC -istud istud (この)
3. flos illa flos illa FLOS ILLE flos illa (あの花)

なお、中間地域が孤立地域をなさなければという補足規範はサルジニアにあてはまる。そこでは中部が交通不便な地域となり、周辺地域をなす北部（サッサリに中心を置く）と南部（カッリアリに中心を置く）がイタリア本土との交流が頻繁であったからである。

### 3. 大地域の規範

大地域とは、たとえばイベリア、ガリア、イタリアにまたがる地域をダキアに対して指す。狭い方の地域が、最も孤立ないし周辺地域をなさない限り、「広い地域の方が、概して古い相を保存している」。

	イベリア	ガリア	イタリア	ダキア
I.	APERIRE	APERIRE	APERIRE	discludere (開ける)
II.	CAPUT	testa	CAPUT	CAPUT (頭)

これに反する例は、

1. cochlearium cochlearium cochlearium LINGULA (さじ)
2. COMEDERE manducare manducare manducare (食べる)

### 4. 後代地域の規範

後代地域とは、たとえばローマ帝国にイタリア半島よりもあとから征服された地域、すなわち属州であり、「古い相が、概して後代地域に保存される」。

	イベリア	イタリア
I.	COMEDERE	manducare (食べる)
	ガリア	イタリア
II.	AVUNCULUS	thius (伯父, 叔父)

これに反する例は、

- |    | ガリア      | イタリア             |
|----|----------|------------------|
| 1. | sifilare | SIBILARE (口笛を吹く) |

	ダキア	イタリア
2.	-istud	-HOC (この)

この規範は、同様に母語から切り離された、いわゆる言語島、いいかえれば後代の言語植民地にもあてはまる。スペインを追放されたユダヤ人たち、さらには南イタリア(シチリアを含む)におけるガリア・ロマンス語の末裔たちがその例をなす。いまひとつはラテン語からケルト語、バスク語、ゲルマン語などへ借用されたものにも、後代地域の規範が働くことを指摘することができる。

## 5 消滅相の規範

二つの相のうち、一方が廃れ、すなわち絶えるか消滅寸前であり、他方が生き残っている場合、「廃れた方が、概して古い相である」。

	イベリア	ガリア	イタリア	ダキア
ARDUVS altus	altus	altus	altus	altus (高い)

ただし逆の例は、

JUVENIS adolescens	JUVENIS	JUVENIS	JUVENIS	JUVENIS (若い)
--------------------	---------	---------	---------	--------------

(最初 adolescens が広まったが、やがて衰え、JUVENIS があとから復活した)。

バルトリのかかげる規範は、標準的なモデルを仮説として列挙したものである。該当する例とこれに反する例とを量的に同じ割合で対照して提供するという慎重さがみられ、しかも両者を比較すると統計的には該当する例が反する例を上回ると述べているに過ぎない。したがって di norma「概して、標準として」という条件付きの規範であることを忘れてはならない。その適用に際しては当然十分な注意が必要である(たとえばある地域が孤立的かそれとも周辺的と見なすべきかといった問題など)。ホール (Robert A. Hall Jr.) が『ロマンス言語学における理想主義』(*Idealism in Romance Linguistics*, New York, 1963)において行った批判もこのような点に向けられていた。ことに同一の意味を担った二つの語に年代的順位を推定することへの疑問を投げかけている。たとえばアメリカ英語において、railway(1752)と railroad(1775)とは最初から共存したという。こんにちでは孤立地域と周辺地域の規範は、ある程度の有効性が一般に認められている。しかしその他の規範には多くの例外が伴うことも覚悟しなければならない。

ここで注目すべきは、バルトリの関心はロマンス語圏に留まらないことである。彼は地域の規範を印欧語圏に、さらにはそれを越えて適用しようと試みていたからである。

周辺地域の規範は、ラテン語が印欧語族のなかに占める位置付けに適用される。ラテン語 istum にみられる -m 型の語尾(対格)に対して、ギリシャ語では τόν にみられる -n 型の語尾が対応するが、次のように図示され、-m が古い相を示すことになる。

ラテン語	ギリシャ語	ヒッタイト語	インド・イラン語
-m	-n	-n̄	-m

さらに同じ図式がウラル語にも提起され、おそらくは両唇音型が歯音型よりも先に生じた相であると推論する。

ラップ語	フィン語	サモイェード語
-m (-b)	-n	-m (-p)

言語史においては、-m から -n への変化の方が、その逆よりも頻繁にみられる事実を考へ合わせればよいという。

-m と -n の関係は、「火」を意味する単語 ignis と πῦρ との間にも次のように同様に認められる。

ラテン語	ギリシャ語	ヒッタイト語	サンスクリット語
ignis	πῦρ	pahhur	agní-
印欧語	サモイェード語	朝鮮語	エスキモー語
ignisおよびπῦρ	pur-(煙)	pul	ingnek, ingnek

より古い相をなす -m および ignis が、非印欧語圏にも及ぶ周辺地域に分布する事実は、トロンベッティ (A. Trombetti 1866-1929) の言語一元発生の仮説、同一語根論に通じるものであることを指摘しておきたい。

バルトリはさらに、言語改新(放射)の中心を決定する地理的方法についても提案する。

イベリア	ガリア	と	イタリア	ダキア
I. EQUA	caballa		caballa	EQUA (雌馬)
1. passer	AVIS		AVIS	passer (鳥)

I. から改新地域は隣接するのが通例であり、1. のような例は一般的ではないとするが、ガリアとイタリアとでは文証時期の規範を適用することによりイタリアが改新の中心であると決定する。

バルトリによれば、ロマンス語圏における改新には、ローマ帝国の南・東部(すなわちイタリア、ダキア)からのものとローマ帝国の北・西部(ガリア、イベリア)からのものがある。ANTE primum (フランス語 AV-ANT, イタリア語 prima), 語末子音の消失(フランス語 DORT, EST, MON, イタリア語 dorme, è, mio; スペイン語 DUERMES, ルーマニア語 dormi), UBI unde (フランス語 où, ルーマニア語 unde)などは前者、すなわちイタリアあるいはダキアからの改新である。FLOS ILLE, flos illa (イタリア語 IL FIORE,

フランス語 la fleur), IRE (シチリア方言 IRI, フランス語 aller), LACRIMA, OCLUS(イタリア語 LACRIMA, OCCHIO, スペイン語 lagrima, ojo), COOPERIRE, SUPRA (イタリア語 COPRIRE, SOPRA, スペイン語 cobrir, sobre)などは後者, すなわちガリアあるいはイベリアからの改新である。

言語改新の原因については, ラテン語における改新とそれ以後の改新とを分け, イタリアはことにラテン語以後の改新に欠ける傾向により, 四つのネオ・ラテン語地域のなかで最もラテン語に近いという結果を生じたという。

この点に関して, アスコリは, イタリアあるいはイタリック語派の地域はラテン語の地元であったためとし, その他の地域は前ローマ期の諸言語の影響をうけたためであるとする基層説を導入した。これに対してバルトリは, ゲルマン, スラヴ, アラブ族によるローマ帝国以後の精神活動への影響を重視する傍層説を採用している。イタリアは, 外来要素が最も少ない地域であるため, ラテン語性を十分保存しえたというのである。ただし基層説にせよ, 傍層説にせよ, バルトリによれば改新の原因は模倣に帰せられることには変わりはない。個々の事例についても, たとえばイタリア語における語末子音 -s の消失がウンブリア語における同様の現象の模倣に起因するという仮説を立てている。言語の改新の原因は優勢なモデルの模倣にあり, それは創造活動の産物であるというのがバルトリの結論である。

なお, 新言語学派の規範は, 少壮文法学派の法則を意識した名称であることは否めないが, 少壮文法学派への反動というより, 元来はそれを補うべき存在であったことが, バルトリが晩年, 新言語学は50年間の彼自身の経験に支えられたものであると述べ, 『空間言語学論巧』(1945)のさいごで, 友人ピサーニのことは「我々はブルークマンの賞賛すべき著書に集大成されている。あの少壮文法学派時代に完成した再建の研究に養われている」を引用し, それに共感していることから窺うことができる。彼が世を去ったのは1946年1月20日トリノにおいてであった。彼が今世紀前半のイタリアの言語学のリーダーの一人であったことは, トロンベッティのあと Comité international permanent de linguistes のイタリア代表として, また AGI の編者として活躍していたことからもうかがうことができる。

彼の学説は, 先に触れたごとく, ことに孤立地域および周辺地域の規範には多くの期待が寄せられてきた。わが国においては柳田国男(1930)にこれを支持すべく方言周圏論があり, イタリアにおいては G. Bonfante ( Language XXIII, 1947, さらに1970 ) がよき擁護者であることが知られている。最近ではグリフェン (T. D. Griffen, 1988) が, 印欧語の再分類(ゲルマン語とアルメニア語がその古い相をなすとする)に地域言語学の方法が有効であることを指摘しているのが注目に価する。

以上はバルトリ生誕120年にちなんで, 言語学史におけるバルトリの再評価のために彼の提唱した示唆に富む学説を簡潔に回想しようとしたものである。

参考文献

- M. G. Bartoli, Introduzione alla neolinguistica. Principi-scopi-metodi, Genève, 1925.
- M. G. Bartoli, Saggi di linguistica spaziale, Torino, 1945.
- M. G. Bartoli-G. Vidossi, Lineamenti di linguistica spaziale, Milano, 1943.
- M. バルトリ 小林英夫訳, 新言語学脈と新文法学派 [方言 V15 1936, 『言語研究・問題篇』 (1937) に収録]
- G. Bertoni-M. G. Bartoli, Breviario di neolinguistica, Modena, 1928.
- T. Bolelli, Per una storia della ricerca linguistica, Napoli, 1965.
- G. Bonfante, "The Neolinguistic Position", Language XXIII, 1947.
- G. Bonfante, La dottorina neolinguistica, Torino, 1970.
- E. コセリウ 柴田武 W. グロータース共訳, 言語地理学入門, 東京, 1981.
- T. De Mauro, Idee e ricerche linguistiche nella cultura italiana, Bologna, 1980.
- G. Devoto, Scritti minori, Firenze, 1958.
- T. D. Griffen, Germano-European, breaking the sound law, Southern Illinois University Press, 1988.
- R. A. Hall Jr., Idealism in Romance Linguistics, New York, 1963.
- C. Tagliavini, Storia della linguistica, Bologna, 1968.
- 柳田国男, 蝸牛考, 東京, 1930.

[付記]

本稿は『早稲田大学語研30周年記念論文集』(1993年3月)に提出済の「M. G. バルトリと空間言語学」を基にしているが、第31回大会(1993年5月)における発表に沿って補足し、全面的に書き改めたものである。なおバルトリの生年月日については、イタリア国内で発行された資料の一部に9月22日生まれとする記述がみられたが、デ・マウロ教授(ローマ《ラ・サピエンツァ》大学)に問い合わせ、正式には11月22日であるとの結論に達した(同教授も訂正された)ことも併せて報告しておきたい。またバルトリの著作目録としては Saggi di linguistica spaziale, pp. XXI-XXXII および B. A. Terracini, "Supplemento alla bibliografia di M. B.", in AGI XXXV(1950)を参照されたい。